

# マルクス生誕 150 年記念集会

—バリーでの催おし—

## 都 留 重 人

1968年5月5日は、カール・マルクスの生誕150周年記念日にあたる。ユネスコは、かねてからこの日を期して「現代の科学的思想発展におけるカール・マルクスの役割」(Le Rôle de Karl Marx dans le développement de la pensée scientifique contemporaine)と題する国際シンポジウムを催おすことを計画し、ユネスコに関係をもつ二つの国際的学術団体、すなわち I. S. S. C. (国際社会科学評議会)と I. C. P. H. S. (国際哲学人文科学評議会)とに、その企画を委任した。最初は5月5日から3日間を予定したが、いろいろな都合で日程は変更され、実際には5月8, 9, 10の3日にわたり、バリーの Maison de l'Unesco でこのシンポジウムは開催のはこびとなった。第1日は公開講演会とし、次の2日間は参加予定者だけの非公開討議にあてることとし、参加予定者は原則としてすべて論文を提出すること、ただし何人かのオブザーバーの傍聴は認めることが決められていた。

参加者の人選は必ずしも十全を期したものは言いがたい。1967年9月に開かれた I. S. S. C. 常任理事会の席でも、一部の常任理事(たとえばソ連のフェドセエフ)が、このシンポジウムには「真のマルクス主義者」を招くことを主眼とすべきだと主張したのに対し、また一部の常任理事(たとえばフランスのストツェル)は、主題を上記のようにきめた以上、現代の科学的思想発展過程でマルクスの果たした役割を高く評価する学者でさえあればマルクス主義者でなくても差支えないではないかと反論し、統一的な見解はなかなか打出せなかった。一堂に集まって討議を十分にするためには、30名ぐらいが適当と思われるが、参加を予定される国の数だけでも30はあるとみられたし、原則として旅費を自己負担(ないしはその国のアカデミー等による負担)としたから、遠隔の人は参加しにくかったし、もともと合理的な解決はむずかしかった。結局、昨年末に一応のリストが出来上がったときには、53名の名前が並び、その国別内訳は、米国10名、フランス8名、ソ連6名、英国5名、ポーランド5名、西独3名、ハンガリー2名、イタリア2名、ブラジル2名で、その他東独、日本、インド等が1名ず

つと予定されていた。しかし現実には、この53名のうち、実に29名が出席できず、そのかわり18名が新しく参加することとなって、出席は42名、そのうち論文提出者は32名(そのほか欠席したが論文だけは提出したものの12名)となったのである。出席を懇請され、あるいは参加できるかもしれないというので昨年末のリストに加わっていたなかには、フランスの Sartre, Levi-Strauss, アメリカの Galbraith, Kuznets, Lipset, Merton などがいたし、最後まで出席を予定していて、ついに来れなかったなかには、Erich Fromm や Wassily Leontief があったが、それよりも打撃であったのは、東欧諸国の出席予定者がほとんどいっせいに、それぞれの国の事情で出国できなかったことである。特に、論文を提出しながら参加できなかったなかには、東独の Jürgen Kuczynski, ポーランドの Adam Schaff, I. Sachs, M. Kalecki 等がある。そんなわけで、最終的な参加者は、オブザーバーを含め、ソ連10名、アメリカ7名、フランス5名、イギリス3名、イタリア、ブラジル、ポーランドおよび日本が2名、その他1名ずつの国を入れて、16ヵ国の参加が得られたにすぎない。アジアからは、日本学術会議代表の守屋典郎氏、インドの A. K. Das Gupta に私を入れて、合計3名にとどまった。

集会の第1日である公開講演は、ソ連の Rumjancev, アメリカの Frankel, チェコスロヴァキアの Zelený, フランスの Aron が行ない、非公開の討議は、2日間を四つのセクションに分け、次の四つの主題をめぐってなされた。

- I. 科学的思想 (座長: Hyppolite, 基調報告者: Rapoport)
- II. 歴史および社会発展の理論 (座長: Ferrarotti, 基調報告者: Zamoškin)
- III. 社会経済上の予見 (座長: Onitiri, 基調報告者: 都留重人)
- IV. 人間としての状態 (座長: Hobsbawm, 基調

報告者: Marcuse)

これは分科会といった性質のものではなく、参加者全員が、この順序で開かれた討議集会に出席するという形でなされたものである。討議は、英・仏・露3ヶ国語の同時通訳でおこなわれ、最終的発表の形式は、いまのところ未定であるが、提出された論文については、編集委員会で多少の取捨選択をおこなったうえで集録公表する予定であり、そのほか、各基調報告(その報告者提出の論文とは別のもの)は、加筆して大体の形式を統一のうえ公表することになっている。討議のやりとりについては、その取扱い方が未定であるが、たとえば第IVセッションで、マルクラーゼに対し一斉反論を行なったソ連の学者の発言を公表しないまま、マルクラーゼの基調報告だけを公表するわけにはいかないだろう。シンポジウムの成果として発表するものであれば、討議の内容こそが重要なはずである。しかし、それにしても、「討議の成果」と言いうるほどに意見の交換をする時間が十分にあったとはいえない。

政治経済学に特に関連の深い第IIIセッションだけをここではとりあげるが、この部に提出された論文は、次の12篇である。

BELL, D. *The Quest for the Historical Marx*

DAS GUPTA, A. K. *Marx's Reproduction Schema and Indian Planning*

FURTADO, C. *Marx's Model in the Analysis of the Underdeveloped Economic Structures*

KALECKI, M. *Marxian Equations of Reproduction and Modern Economics*

MILEJKOVSKIJ, A. *Marx and Economic Planning*

MURGESCU, C. *La présence de Marx*

ONITIRI, H. M. A. *Marxism and African Economic Development*

ROBINSON, J. *Value and Price*

SACHS, I. *Marx and the Foundations of Modern Economic Previsions*

SAUVY, A. *Les Idées de Marx et les doctrines des population*

TSURU, S. *Marx and the Analysis of Capitalism*

VINOGRADOV, V. *Marxism and Public Ownership*

参加者にたいしては、シンポジウムの主題が「現代の科学的思想発展におけるカール・マルクスの役割」であ

ること、したがって、マルクスの伝記とか「マルクス解釈学」的なものとかは提出論文の内容として不適當であることが、繰返し伝えられた。つまり、今回のシンポジウムでは、マルクスの現代的意義を討議するというのが主眼であったのだ。この観点からすると、Bellの論文は場ちがいであったと言わねばならぬ。これはマルクス学説そのものの批判的評価であり、「聖書のように扱われながらめったに読まれたことがない」マルクスの著作は、綿密に調べてみると、あいまいさと矛盾に満ちている、という結論を突きだしたものでしかないからである。この種の論文が出てくることじたいが、今回のシンポジウムの企画に真剣さが足りなかったことの証拠であるといふべきかもしれない。

その他の論文も、その大部分は、第IIIセッションの主題であった「社会経済上の予見」を主として念頭において書かれたものとはいいがたく、むしろ第IIセッションのほうに含められたKuczinskiの *Karl Marx et l'analyse scientifique de la condition des travailleurs* や第Iセッションで扱われたOjzermanの *Marx's Historical Materialism and Certain Problems of Scientific-Technological Progress* などのほうが、第IIIセッションの目的にかなっていると思われたくらいである。

第IIIセッションに提出された論文を素材としていうなら(筆者の提出論文は一応別として)、問題群はほぼ次の三つに分つことができた。

- (1) 生産力と生産関係の統一として生産様式を理解する史的唯物論の立場を発展させようとしたもの。
- (2) マルクスの価値論の意義を再確認しようとしたもの。
- (3) マルクスの再生産論の現代的意義を展開しようとしたもの。

このうち、第1の問題群に主として関連するのは、Milejkovskij, Onitiri, Sachs, Sauvy, Vinogradovであり、第2の問題群を扱ったのはRobinsonであり、第3の問題群に関連をもったのは、Das Gupta, Furtado, Kalecki, Murgescuである。

経済社会には、その社会の特定の仕組を超えて普遍的な技術的發展に焦点を合わせうる生産力の側面と、その社会に特徴的な人間の社会的な結び付き工合に焦点を合わせた生産関係の側面とがあり、この両者が相互に緊張関係をもちながら統一されているところに社会経済発展の姿があるとみるのが、マルクスの根本的な立場であると思われる。近代経済学は、この生産関係の分析を無視

するか、あるいはそれを超歴史的な技術諸関係の形におきかえてしまうかするために、特定段階にある社会の運動法則を見抜くことができない。この点を特に強調したのは Sachs であったが、彼の場合、そこから引きだされた結論は、すべての国に同じマクロ手法を適用する国民所得分析にかわって、“typology”(型態学)の立場から各社会の実証研究を行なうこと、そしてそのさい利用すべき「中心的なカテゴリー」は「経済剰余」の概念であるべきことというにとどまり、どちらかといえば方法論上の主張に終わったという感が深い。これにくらべ、Sauvy の論文は、マルクスの上記の方法論的視点がどのように現代の人口問題分析に適用できるかを、かなり具体的に論述したものであって、示唆するところが多い。他方、Onitiri の論文は、正確に言えば、マルクス主義がアフリカ社会においてどのように受け入れられてきたかを論じたものであるけれど、そのインパクトの在り方を論ずるにあたって、アフリカ社会の経済構造的特徴のもつかわりに注意を喚起した部分が、注目に値すると思われる。

Vinogradov と Milejkovskij とのあいだには、一種の分業があったようである。両者とも、生産力の発展につれて生産の社会的性格がおのずから強まり、資本主義的な生産関係を古いままでは維持できなくなるという基本的な命題から出発するのだが、Vinogradov のほうは、そこから生産手段公有の体制が不可避になるという議論を展開するし、Milejkovskij のほうは、そこから計画化が不可避になるという議論を展開する。前者は、どちらかといえば、公式論の域を出でず、社会主義になってはじめて生産手段の公有は実現でき、それは私有制にくらべて大きな利点をもつという点を、綿々と説いたものにすぎないが、後者は、その内容において、ガルブレイスの『新しい産業国家論』に類似した部分を含み、きわめて興味深い。すなわちそこには、「科学産業革命そのものが、なんらかの形の計画化を利用することなしには、これ以上の生産力の発展ができないようにした」という認識や、「先進資本主義諸国においては、生産の発展それじたいが、計画化への客観的な傾向を生みださせる」という見解が見受けられるのであって、そこまでの論旨にかんするかぎり、ガルブレイスと完全に軌を一にしている。見解は、このあとで分れるわけで、ガルブレイスが、新産業国家での計画化の必然性は古典的な意味での市場を止揚するところまでいたり、消費者主権ならぬ生産者主権の行使を可能にするという、資本主義と社会主義とは収斂化せざるをえぬと主張するのに対し、ミレイ

コフスキーは、資本主義的市場は依然として無政府的性格をそなえた市場であるという立場をとる。すなわち彼によると、国際的性格を帯びるようになった科学産業革命がすべての国に計画化を要請しているにもかかわらず、資本主義国は市場の無政府性のゆえにこの要請にこたえることができないとするのである。両者の見解の分岐点になっている「市場」論が、今後の論争課題としてのこされた感じである。

マルクスの価値論の意義を再確認しようとした Joan Robinson の論文は、残念ながら、参加者の大部分の理解を超えたようである。一口でいえばロビンソンの論点は、新古典派の理論が賃金・利潤の分析を技術的次元に還元しようとする誤りをもつということであって、彼女は、マルクス主義者が新古典派の土俵にあがって新古典派の術語を使いながらその点を論証できるはずだと力説した。ロビンソンは、すでに 1942 年の著書 *An Essay on Marxian Economics* のなかで、新古典派には真の意味で利潤理論がなく、したがって「商品の価格を決定するものは何か」についての答えをもたぬのに対し、マルクスは「搾取率」の概念を導入して利潤を説明しようとするという点を指摘したが、今回の論文も、その理論的筋書においては、それとほぼ同じ内容のものということができる。前著では「産出物単位当りの利潤、資本単位当りの利潤、産出物単位当りの資本という三つの決定要因がすべて相互依存的であるために、分析全体が不確定な霧のなかに包まれてしまう」というにとどまっていたのを、今回は、その後公けにされたスラフファの著書 *Production of Commodities by Means of Commodities* をよりどころとしながら、価格論が結局は価値論に根をおろすよりほかないことを論証しようとしたのである。新古典派に対する批判の要点は、資本の価値が利潤率と独立には決定できないときには彼らの価格論が崩壊するという点であって、この点の説明は前著にくらべて新しいと言えようが、マルクス理論を説明する段になると、依然として、「搾取率は階級闘争における諸勢力のバランスによって支配される」という命題から一步も出ていない。すなわち、一種の勢力説によって賃金のシェアがきまる、これと素材面での投入産出諸関係とが与えられれば、利潤率がきまりひいてはその利潤率を含むところの価格体系がきまる、というのがロビンソンの主張にほかならない。興味深いのは、彼女がこの基本的な考え方を使って社会主義国の「合理的価格体系」を論文の末尾で扱ったことだが、それがソ連等における論争を十分にこなしただうえでの展開でなかったためか、討議のさいに

は無視されてしまった。

マルクスの再生産論の現代的意義を論じた四つの論文のうち、理論的内容をもったものは Kalecki のそれだけであったといつてよい。Murgescu のは、マルクスの理論が現在でも生きていて、近代経済者のなかにさえそれに依存しているものが少なくないことを、総論的に論じたものであって、再生産論だけを取扱った論文ではない。Furdato は、再生産表式の諸範疇を使って議論を展開してはいるものの、言わんとしていることは、先進国と低開発国とでは生産力の進歩に伴い質的に異なった発展がみられること、後者においては労働力過剰の事態が激化する一方、追加需要の性格に片寄りがあるため経済発展はかえって阻害されること、したがって、先進国では漸進的手段による経済進歩が可能であるかもしれぬが、低開発国では根本的な社会変革が必要となること等である。マルクスの諸概念を使うということとマルクスの理論を活用することとは、必ずしも同じではないわけで、フルタードにおいて見られるのはむしろこの前者である。再生産表式などにはこだわることなく同じ議論を展開したほうが、彼の場合、より効果的であったかもしれない。Das Gupta の論文は、1951年4月以降実施されてきた数次にわたるインドの5ヵ年計画が、直接的にはないにしても、マルクスの再生産論的な思考方式に負っていることを明らかにしようとしたものである。マハラノビス・モデルがフェルドマン・モデルに負っており、フェルドマン・モデルがマルクスの再生産論から出発しているという意味では、ダスグプタの問題展開もうなずけないことないが、マハラノビス・モデルとマルクス再生産論との重要なちがいが無視されている点は、不問に付すわけにはいかない。再生産論における重要な視点の一つは、第1部門と第2部門とを素材面で分割し、各部門内を不変資本・可変資本・剰余価値というふうに価値面で分割し、この二面的な分割を統一的に把握するという点にあった。これに対して、インド5ヵ年計画で利用されたというマハラノビス・モデルは、ケインズ流に純生産物だけを取りあげて、それを投資と消費とに分け、そのそれぞれを「部門」として構想したところの2部門分割である。したがって、「消費部門」のなかには、消費財産

のための生産財で補填用のものは含まれてしまうことになるし、「投資部門」について「資本対産出高比率」をうんぬんすることは素材的には無意味なこととなってしまふ。つまり、再生産論の本来の意義を無視するのではなく、インドの5ヵ年計画方法論をその応用とは言えないのだ。ダスグプタ論文の根本的な弱点は、そこにあったと思う。

もちろん、ケインズ流の2部門分割とマルクス流の2部門分割とのいずれもが例証できるようなモデルを考へることができないわけではない。生産財は永久に使用可能な耐久財だけであると仮定すればよいわけで、そうすれば、生産財生産と新投資とは一致する。このような仮定のもとに、そして更には消費財を資本家用と労働者用とに分け、3部門構成にして再生産論を展開しなしたのが Kalecki の論文にほかならない。彼がそこで論証しようとしたことは、再生産論のいわば有効需要側面であつて、「三つの部門における利潤と賃金への所得分配の在り方を所与とすれば、投資と資本家消費とが利潤額と国民所得とを決定する」という命題につきるといって差支えない。この系論として、いわゆる「外部市場」の重要性が明らかとなり、カレツキはローザ・ルクセンブルグに敬意を表するわけだが、現在ではローザのいう「外部市場」にかわるものとして政府支出が大きく一役を買っていることを指摘する。本人が出席できなかったために討議も省略されたが、理論家カレツキの論文としては期待を裏切るものであつたという批判は、雑談のあいだにも聞かれた。

さて、以上の論文によつてもわかるとおり、第IIIセッションの主題をなした「社会経済上の予見」の側面を真向からとりあげた論文は、今回は皆無に等しかつたといつてよい。そのためでもあつたらうか、討議の過程で、ユネスコのHersch女史が特に発言して、マルクス政治経済学の予見をどう評価するか、そこに顕著な予見力をみてとるなら、それは何に起因するというべきかという質問を提起した。日本から宇野学派の人が出席していて、この間に答えていたら活発な討議がえられたであらうにと惜しまれてならない。